

地域を創る子どもたちの力を育てて見える化する

令和6年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】 採択課題

課題名：岩手町の地方創生を担う「地域共創人材」の評価方法の開発

研究代表者：高等教育推進センター 渡部芳栄

課題提案者：岩手町

研究メンバー：高瀬和実（高等教育推進センター）、谷地健人・田村寿（岩手町）

技術キーワード：地域共創人材，成果の可視化，SDGs

▼研究の概要（背景・目標）

背景：岩手町「SDGs未来都市共創プロジェクト」で定義された地域共創人材に必要な10の資質・能力について、どのように評価し、育成していくかを明らかにする必要性

目標：岩手町と町内学校の実態をふまえ、高校生を対象とした調査の設計・実施・分析を行い、教育改善につなげ、将来的には地域課題の解決にも資する

▼研究の内容（方法・経過）

R5調査の概要と課題：10の資質・能力に関する心理学的概念や既存尺度を検討し、200問からなる質問紙調査を実施。信頼性は高かったが、妥当性に改善の余地。項目数の多さによる集中力低下も課題。

R6調査の概要：「10の資質・能力」それ自体を評価基準（評価の観点）とし、岩手町版ループリックを新たに開発。

調査対象と調査時期：沼宮内高校の2年生（10月）・1年生（12月）

評価の基準：10の資質・能力全てにおいて、「3」が理想像となる4段階の達成度を設定

▼研究の成果（結論・考察）

- 両学年とも、選択肢「2」（図1の水色）に回答が集中した項目が多く、評価基準の設計が比較的適切である可能性が示唆
- 一方で、「4」や「1」の選択肢が多く見られた項目（例：q3, q10, q9など）については、評価の適正さや表現の見直しが必要
- 回答時間は1年生が約12分、2年生が約20分
→非認知能力を測定する各種業者テストに要する時間と比較しても、長いとは言えない

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

成果：10の資質・能力に対応する評価基準（ループリック）の初版を開発，分析，基準の妥当性の評価

今後の課題：現場で機能するループリックになっているのかの検討。また，蓄積するシステムの可能性

小中学校への適用可能性（小～高の一貫した評価）の検討

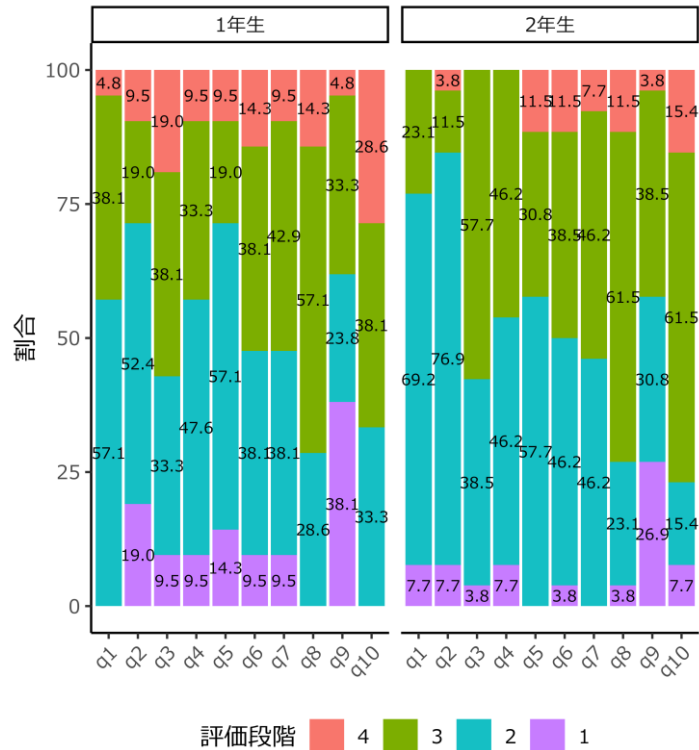


図1 資質・能力別，学年別回答状況

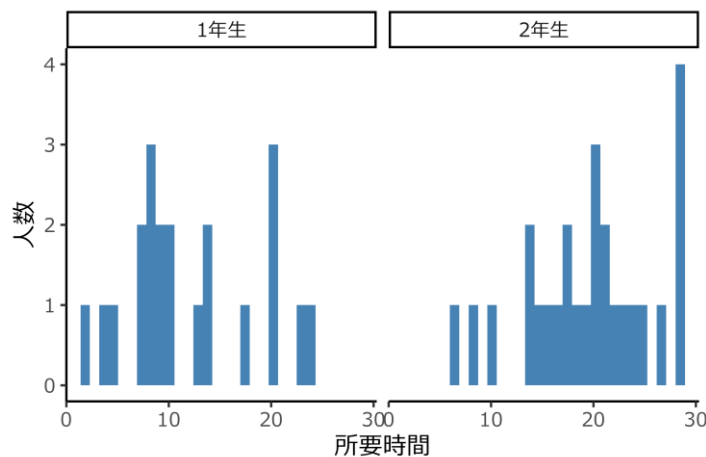


図2 回答時間（分）別生徒数